今年の新入生への特別な思い

歯学部長　二階宏昌

新入生諸君、入学おめでとう。

西条キャンパスでスタートする新入生を迎えるのはわが学部にとって勿論初めてのことである。今、我々は六年間の一貫教育を目指した新カリキュラムを策定中であり、あるいは諸君が西条で旧来型の歯学進学課程を経る、最初にして最後の学年となる公算が大きい。

歯学部及び同附属病院

歯学士に、そして歯科医になるのになぜ六年間の教育が課せられるのか、なぜ専門学校じゃなくて、学問の府たる大学なのか、まずは考えてみてほしい。専門的な職能習得に時間がかかるのは確かである。しかし何よりも大切なのは、諸君が人を相手の、人の病気と健康に関わる生命科学の担い手となることである。人の心に触れながらの、対話を通じての全人的医療こそ真の医行為である。当然のこと、まず諸君自身が倫理を弁え、知性と品位を備えた人物であらねばならぬ。そのためにもこの二年間、教養的科目をしっかり学んで幅広い知識を身につけてほしい。西条の素晴らしい自然環境にあっては、季節の移ろいにも心を寄せ、体育活動にも励んでほしい。なぜこんな平凡なことばを贈るかというと、享楽に溺れ、あるいは怠惰な生活が身の習いとなってそれを専門課程に持ち込む例にしばしば苦慮してきたからである。自由で教養的な二年間を経たからこそ、もし本学年が専門基礎的教育の充実を図った学年よりも魅力ある人材を輩出したとしたら、我々は再び歯学教育の理念と方策を問われることになる。

新入生諸君に贈る

歯学部学生　平岡秀樹

新入生諸君に歓迎の意を表する。おめでとう。諸君がこれから過ごす何年間かを、共有できることをうれしく思う。

自分のことを思い返してみると入学式の後、予備校時の友と桜の舞い散る平和公園で飲んでいたところ、隣にいたおじさんに刺身やつまみを「おめでとう」という言葉とともにもらったこと、その後一気飲み（当時は一気飲みが普通だったなあ）して初めて袖を通したスーツを汚してしまったこと、その夜は当地、広島カープの開幕戦を毛布にくるまって観戦したことなどが出てくる。

さて、諸君にどんな生活が待っているだろう。待っているだけでは、それはただ通り過ぎていくことが多い。それをつかむにはそれなりに積極的にならざるをえないだろう。自分なりに接していけばよいと思う。時には真剣に、時にはいいかげんに、その中で自分なりのスタンスを築いていこう。人生八十年の中の数年なのだから。

はて、僕にとってのそれとは？